

に「クラブ的」空間に足を運ぶことがわかった。

渋谷がギャルの聖地として、ギャルの高密度空間であり続ける限り、ギャルは誕生し続けるであろう。また、彼女たちは、「クラブ的」空間で見た人や雰囲気、得られた感覚を常に持っていたがためにギャルファッションで身を包み、その力を最大限に与える本場の服を求めて、同時に、日常からの離脱を求めて渋谷に向かうのである。

村上春樹の小説にみる「ホテル」の意味の多義性

山口 寛子

ホテルとはどういう空間だろうか。筆者は最近の雑誌や映画・文学作品にホテルが都市空間の中で「泊まる空間」以上の意味があるのではないかと感じた。

本論では村上春樹の小説の中のホテルを読み解いていくことによって都市空間でのホテルの多義性を解明する

具体的には『羊をめぐる冒険』の「いるかホテル」、『ダンス・ダンス・ダンス』の「ドルフィン・ホテル」と「いるかホテル」、『ねじまき鳥クロニクル』の「208号室」を考察する。

村上春樹は川本（2006/1980）によると「都市の感覚」を持った作家である。作風では現実世界と主人公の内的空間を行き来する物語が多い。多くの論評がかかっている。

まず『羊をめぐる冒険』であるが、ここでは古くさいホテル「いるかホテル」が、主人公が現実世界と異界を行き来する際の通過点になっていることをあげる。次に『羊をめぐる冒険』の続編である『ダンス・ダンス・ダンス』では現実世界では「いるかホテル」が建っていた場所に高級ホテル「ドルフィン・ホテル」がここでは「ドルフィン・ホテル」がそして、ホテルは、誰もが通りすぎる場

所であることから、「いるかホテル」を「僕」が孤独で空虚であることをあらわしている。

『ねじまき鳥クロニクル』の「208号室」においては、「208号室」のあるホテルがだんだんと変容していく様子を見ることによって、ホテルがだんだんと「おぞましい空間」になっていく様子を指摘する。

このように、ホテルにいろいろな意味が付与されるのは、ホテルが「限定的に」居住する空間だからである。家とは違う「ホテル」は完全にすむ空間にはなり得ないことから、意味が浮遊し、多くの意味を含ませることのできる空間となるのである。

観光スポットの個人的な聖地化： 東京タワーを例に

山崎 百合

人間は場所に意味を付与しながら生きていられると言われている。このような「場所への意味づけ」はどのように行われていくのだろうか。本稿では、小説『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』（リリー・フランキー著）を題材に見ていく。一般的には観光スポットとして消費される東京タワーが、個人的にはかけがえのない「聖地」という意味を持つようになるのではないかと、という仮説を立てて検証した。

先行研究では、第2章で、意味づけにおいて「個人的な経験」が最も重要な要素であることを指摘した。また、「聖地」が持つ意味についても調べ、宗教的意味がない場所も聖地となりうるのではないかと可能性を示した。第3章では、塔が「聖」の象徴性や「高所衝動」という精神作用を持つことについて紹介した。第4章では、小説の舞台となる東京タワーについて論じ、一般的に観光スポットとしての意味を持つことを確認した。

第5章では実際に小説の読み取りを行った。幼少の頃のボク（リリー・フランキー）